

Vol. 164

2017.10.10

理事長トーク Top Interview

健育会グループ 平成29年度 医師研修会が行われました

医療法人社団 健育会 理事長 竹川節男



2017年9月30日（土）、ANAインターコンチネンタルホテル東京（東京都港区）にて健育会グループ平成29年度医師研修会が行われました。



「平均寿命と健康寿命の差が10年ある」これは、現代の日本の大きな課題です。この人生最後の10年間で、患者さんご本人にとって決して幸せとはいえない時間として過ごし、家族もその方の介護で疲れ切っていくという悲しい現実があります。またそれに加え、国の財政に対する負の影響も無視できません。この不幸ともいえる状況を変えていくためには、国民の健康寿命を延ばすことで、この10年を縮めていく必要があります。そして同時に、日本の医療現場における終末期医療の在り方を変えていく必要があります。私は、その改革のリーダーは医師だと考えています。



このような考えから、昨年の医師セミナーでは、長尾クリニック長尾先生に末期がん患者の医療についてのお話を伺いました。そして今年の研修会では、ご夫婦で終末期高齢者の医療に取り組まれている北海道中央労災病院の院長宮本顕二先生と江別すずらん病院 認知症疾患医療センター センター長の宮本礼子先生をお招きしてご講演をお願いしました。



まず前半に宮本礼子先生から「日本の高齢者終末期医療の現状」という演題でご講演を賜りました。



宮本礼子先生の話の中では、なぜ日本で高齢者の延命が行われるのかということに関して、「1. 我が国にある延命至上主義」、「2. 本人がどのように死にたいかという意思を表明しない」、「3. 周囲も本人の意思を聞こうとしない」、「4. 医師が遺族から延命措置を怠ったと法的責任追求が行われる恐れ」、「5. 診療報酬や年金など社会制度の問題」などの理由を挙げられていました。また何より「自分は受けたくない、と思うような延命措置を物言わぬ高齢者に行なっていること」が倫理的に問題があるとおっしゃっていました。



私は、医師はまず、医療現場に今までになかった「新しい役割がある」ことを認識しなければならないと考えています。旧来の医学部教育では、医療の役割は異常状態を正常に戻すこと、そしてできるだけ延命に努力をすることであると教えてきました。このことが先ほどの「我が国にある延命至上主義」という話にもつながっています。しかし、高齢者の終末期では、若人や一般成人とは別の視点が不可欠であり、何よりも私は『豊かで苦痛の少ない、人間の尊厳が尊重される人生の最期をサポートする』ことが医療に求められていると考えています。

また「老いることは自然であり、命には限りがある。しかし、それが受け入れられない家族がいる」ということもおっしゃっていました。確かに実際の現場では、患者さんが大往生を実現できるような最適な医療判断をご家族がすることはなかなか難しいのが現状です。このお話を伺いながら、昨年より様々な機会を通じて健育会グループの医師に伝えていますが、「医師には死を受け入れられない家族を納得させる見識、人間力が必要」ということを改めて感じました。



後半には宮本顕二先生から「欧米豪の高齢者終末期医療の現状」という演題で、スウェーデン、オーストラリア、オーストリア、オランダ、スペイン、アメリカと6か国の終末期医療を視察した内容や先生のお考えなどのご講演を賜りました。



例えば、スウェーデンでは、胃ろうなどの経管栄養の患者さんはいないそうです。また、オーストラリアにおいても、緩和医療が中心で、「食べるだけ飲むだけ」で亡くなっているとのことでした。その理由は、高齢者が終末期を迎えると食べられなくなるのは自然な事で、経管栄養や点滴などの人工栄養で延命を図ることは非倫理的であると、国民みんなが認識しているからということで、日本のように医師に法的責任追求が行われることもないそうです。逆に、欧米豪においては人工栄養で延命をそんなことをするのは老人虐待という考え方もあるそうです。



そして、高齢者の終末期医療において必要な視点として以下を挙げておられました。

高齢者の終末期医療に必要な視点

1. 尊厳：人として死ぬ
2. 緩和：穏やかに最期を迎える
3. 倫理：自分が望まないことは相手に行わない
4. 患者の意思尊重
5. 医療費増大を防ぐ



この5つの視点は、健育会グループの医師にもぜひ持って欲しい視点です。先生のお話を伺いながら、まず医師が、これまで常識とされてきた医療の役割を今一度問い直し、高齢者の終末期医療に関して意識改革をしなければならないし、患者さんの人間の尊厳を尊重していくためには自己研鑽を積んでいかねばならないと痛切に思いました。

講演の後は、医師研修会の恒例となっている、ご家族のみなさんも招いた懇親会を行いました。懇親会の前には、今年の4月に開院したねりま健育会病院の酒向院長、11月に開院予定の湘南慶育病院の初代院長に就任予定の松本先生、そして同病院でスマートリハ室長を担当される予定の赤星先生にその概要を紹介して頂きました。



酒向先生の話から、ねりま健育会病院が当初の高い理想の元に着実に取り組みを進めている様子や、松本先生、赤星先生の話から、湘南慶育病院の慶應義塾大学医学部や企業と連携した最先端医療の取り組みや現在の準備状況の報告を受け、集まっている医師たちにも刺激になったのではないかと思います。



乾杯は、元 慶應義塾大学病院 院長、現 独立行政法人 国立病院機構 東京医療センター 名誉院長、現 三四会 会長で今年4月より健育会グループの顧問を務めて頂いている武田 純三先生に音頭をとって頂きました。



会の途中には、この1年に健育会グループに入職した医師の紹介が行われました。今年も新しい医師を多数迎えることができ、大変嬉しく思っています。またこれから11月の湘南慶育病院の開院に向けて、新しい医師が入職予定です。



健育会グループは今年、2病院を新たに開院し、9病院・2クリニック・13介護施設・47介護事業所となり、病床数もグループで全体で2000床を超えることになります。グループがさらなる飛躍をしていくためには、医師のリーダーシップがますます重要となります。

健育会グループでは、医師に求める役割は「医の倫理の番人であることの自覚」と「クライアントから信頼される努力を惜しまない姿勢」という2つを掲げています。そして、その実現のためには、人間力のある医師を組織的に育成していくことが必要だと考えています。

そして「健育会グループの医師は、専門性が高く、人としても信頼できる」と患者さんに言っていただけるよう、医師の人間力を高める教育に取り組んでいきたいと考えています。

